

I. 活動の背景と目的

超高齢化社会となる21世紀の日本においては、各個人がノーマライゼーションの思想に基づいた、主体的かつ創造的な生き方を求められる。

それに向けて、自主的に、自立した生き方や<共生><協働><相互扶助>の生活ができる場が必要である。それは現行の社会保障をさらに発展的に充実させ、一人一人のQ.O.L.向上にもつながるものである。

II. 活動のテーマ

「LB研究会」は、世代間の垣根を取っ払い共通意識を目標に

- 1) '90年代に入り、世界的な時代革新が大きい波として加速してきたこと。
- 2) 国内では、人口の高齢化が社会問題としてクローズアップされてきたこと。
- 3) なかでも、熟年世代が、来る21世紀にむけて、どういう生き甲斐をもって晴れやかに生き、自ら満足し納得できる人生を楽しく全うできるかについて、考え研究していく情報交換の「場」が求められていること。
- 4) 一方、それを実践するための、今までにないシニアのための新しい生活の「場」づくりが切望されていること。
- 5) そのためには、価値観と志しを同じくする者が集まり、このテーマに能動的にとりくみ、所期の成果をあげていくことが必要なこと。

上記の基本認識をベースとして、有志発起のもとに、1993年7月「LB研究会」が発足した。これは、「個人各々が選択する生き方(Life)」に「共通の価値観にあたる橋(Bridge)」を架け合うことを通じて、協力と自立意識を理念とする新しい生き方への試みを共に切り拓いて生きたいーという意味で、L i f e, B r i d g eの頭文字LBを標榜している。



定例会

また、個人個人の架け橋、世代間の架け橋、地域社会との架け橋となるべく調査・研究・活動・セミナー開催等々を通じて新しい自立した生き方の提案を続けている。さらに、その提案の実践の場として、新しい住まいであるコ・ハウジング創りを計画したのである。このコ・ハウジング(LBハウス)は

- ・居住者が自ら参画し選択した住まいであること。
- ・居住者各々が自主運営する住まいであること。

・コモン・スペースをもち、多くの人々が出会い集い交流する住まいであること。
を基本理念として医療の場ではなく、あくまで生活の場であり、医療機関と速やかに治療を受けられるシステムにする。

これを実現していく為には、居住者相互が相手の違いを認め合い、価値観と志しを同じくする者が集まり、「生き甲斐」と「安心」を「買う」のではなく、プライバシーの空間を保ちながら、協働生活のもとで明るい日々を過ごすことのできるものを追及し、参画して創造建築するのである。

建物の性格としては、マンションでもなく、ホテルでもなく、養護施設でもなく、病院でもない、がこれらの要素をすべて包含していることが必要と考える。つまり、地縁が集まった新しい家族の住まいである。

このような自立意識や社会的役割分担は病気予防や健康促進につながると考える。さらに共生、協働、相互扶助、自助努力に基づく住まい方は精神的ケアが重要とされる在宅介護も可能にする。ここから、地域間や世代間の交流が生まれノーマライゼーションの思想が根づく社会の再構築が発信される。

また、高齢、即ち障害が進むということ为前提にして、居住各所に、住み易い工夫配置(バリアフリー)を必要とするが、残存能力・機能を大切に保ちながら、地域の自然環境にマッチした個性的で、魅力的な建物としたい。

植物の栽培と栽培管理を手段として精神的、肉体的障害を軽減あるいは、治療することと同時に、家庭菜園を設け、「花」「野菜」などを育てていくことにより居住者相互のコミュニケーションをはかるための野外での憩いの場も設ける。

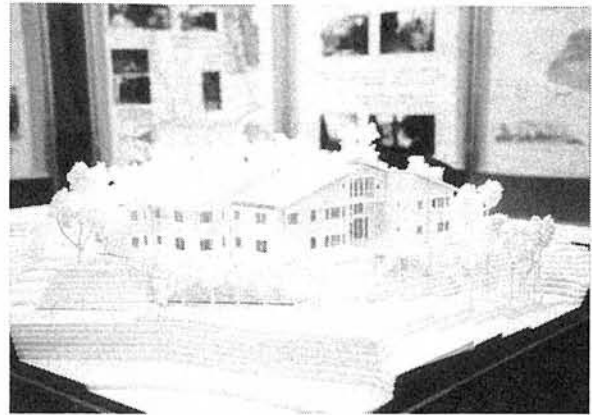
このような目的の視点から、この展開は伝統的町並みが残る自然の多いローカルエリアで小規模(8戸)もので進めたいと希望している。

さらに、地域とのつながりを大切にし、人と人とがこの「LBハウス」で出会うことから何かが生まれるようにし、地域の人達及び入居者のもてる趣味、特技などの提供によるカルチャー教室の開催、講演会などを通じての交流会などコミュニケーションを計っていききたい。その他、地域のボランティア組織とタイアップし、給食サービスの実施、将来に備えては、行政の協力も得てディサービス、ショートステイなども考えていきたい。

日本各地で自然破壊、環境破壊が発生しているが、古き良きものを見直し、地域の土地柄、由緒ある歴史の町、史跡、環境は心して守っていかなければならない。また後生に伝えるべく地元の人々と手をたずさえ、守っていく為の活動を惜しみなく推進するための拠点ともしたい。

「LB研究会」は社会的意義のあるものを目指し、主旨を各地に拡げることにより、老人保健福祉に貢献し、老人ホーム・特別養護ホーム・介護保険を頼らないですむ人を増やし、社会的入院患者を減らすことに貢献していきたいと願っている。

国も行政も施設建設や介護保険の実施を急速に進めているが、要介護高齢者のすべてを収容・解決することは不可能である。また単身、少子化のこれからの社会のなかでは、在宅介護の促進、ホームヘルパーやボランティアの含む要員の養成もなかなかかどらない



LBハウス模型

のが現状である。

また一方で大事なことは、高齢化が進むとは言うものの、心身共に健康な高齢者も多いことにも目を向け、そういった人達が自立意識をもち自助努力のもとで協力・協働して生きていく方法を模索している一つのモデルとして、この「LB研究会」「LBハウス」に注目していただければ、幸いである。

III. 活動の内容

2000年3月までにのべ8回の研究会を開催し、活動記録誌『LB通信』を3回発行した。1999年10月には「ふくおか女性まつり」に参加し、この間以下の個別面談説明会及び現地訪問などを行い、居住者のアプローチを意欲的にすすめた。

以下、活動内容。

1999年

4月11日	第74回研究会	10月10日	第79回研究会
24日	「LB通信」Vol.15発行	23日	ふくおか女性まつり
5月9日	第75回研究会（地主と面談）	24日	〃
22日	山口NPOサポートネット ワーク情報交換（於、山口）	24日	福岡朝日新聞掲載
24日	出版企画JUN設計（於、福岡）	28日	助成活動中間報告
6月20日	第76回研究会	11月24日	「LB通信」Vol.17発行
7月10日	山口県知事面会（於、大阪）	12月12日	第81回研究会
11日	第77回研究会	17日	弁護士面談（懸案事項）
24日	「LB通信」Vol.16発行	2000年	
9月8日	福岡朝日新聞学芸部取材	1月16日	第82回研究会
12日	第78回研究会	20日	個別面談説明会
		21日	〃



ふくおか女性まつり パネル展



ふくおか女性まつり 対談企画

IV. 活動の効果

1年の活動を通し、比較的若い（50歳前後）世代に、関心が広まってきた。また、昭和二桁生まれの世代が還暦に入ってきたが、戦後の教育を受けたこの世代は、70歳代以上の世代とは異なるライフステージ、ライフスタイルを持つ。それは既存の有料老人ホームや公的施設に入居することに強い抵抗感があり、自分の思い通りの住宅をつくり、血縁同

居にこだわらず、気の合う仲間と暮らしたい、自分のライフスタイルを実践したいと思っている人が多い。また、高齢者になっても住み続けられそうだからとか、住宅の管理が楽になるとか、身体機能が低下したときに他人から施設に入れられるよりは、その状態に対応できる住宅を予めつくりたいという自分の将来への予防的措置として捕らえるなど、その動機づけがはっきりしてきている。

「LB研究会」の特徴は、これまでのシルバー向けの住宅が終の住処づくりを目標としてきたのに対し、新しい人生の第三期の住処づくりを目標としていること。このことから、これからの生き方と住まい方の意識の変化をみることができる。

また、入居希望の会員のみで建設計画を行うのではなく、女性の視点からみた、女性の設計による入居者主役の暮らしやすい住まいづくりを一般会員も参加する形での建設準備を考えてきた。このように多様な価値観を共有することで、よりよい個性的な仲間をつくりながら住まいづくりを実現の方へ向かっていることが活動の成果と感じられる。

V. 今後の課題

コ・ハウジングづくりは、高齢期よりも少し前のシニアの時期からスタートすることが望ましいと思う。また重要なことは、「LB研究会」のようなグループに対する公的援助の在り方がなかなか見つけられない。従来の都市基盤整備公団のグループ分譲制度や住宅金融公庫の融資、住宅供給会社の枠内では対応できず、新たな制度や新しい型のコーディネーターが必要である。

地価を顕在化させないで自分たちの住まいづくりを行う方法として、土地を所有せず定期借地権を利用して建設する場合のシステムが整備されていないことと、事例がないため地主との土地の契約・交渉に困難を極め、限界を感じる。

また、参加を希望する人々は意識は高いとはいえ、家族での同居の経験はあっても他者との共同生活の経験がなく、契約概念に基づいた社会生活の乏しい日本においては、新しい共同生活へ移行し、それに慣れるためにはコーディネーターやサポーターの存在が重要である。

しかし、今後高齢化社会を迎え、家族機能の衰退、非婚・離婚の増加、女性の就労化が予測されている中では、医療・保険・福祉のコスト削減の予防的効果の点からも期待されると考える。また、ファミリータイプのコーポラティブ住宅づくりとその良さを経験してきた団塊の世代がシニア、高齢期を迎えたとき、それは社会的にも上述したような時期と重なるときでもある。その「高齢者新人類」の先駆けとして「LBハウス」を「LB研究会」は是非とも実現させたいと思うのである。